ガルボばあさん（『若き日の芸術犬の肖像』から）

A Translation of “Old Garbo” from Dylan Thomas’s *Portrait of the Artist as a Young Dog*

坂 本 正 雄 訳
translated by Masao SAKAMOTO

2009年10月１日受理

ファー氏は暗くて、狭い階段を氷の上を歩くように慎重に、うんざりして歩を進めた。見なくてもあるいは滑って転ばなくても、氏にはわかっていた。悪ガキどもがバナナの皮を暗いところにまき散らしているのだ。トイレにたどり着けば、水盤は詰まっているだろう、くさりも予定通りぱちんと切れることだろう。「ファー氏は、神父ではない。」という茶色の字の落書きを、氏は思い出した。それから流しが血で一杯だった日のことも。だれも自分のだとは言わなかった。女が階段を突進して、横を通り過ぎていった。ぶつかって、氏が手に握っていた新聞が落ちた。女は謝らなかった。しかも便所の戸を開け損ない、咥えていたたばこの葉がふっと燃え下唇をやけどした。氏が自分の運命を呪い、ガタゴト音をさせ、歌うような泣きごとを言い、小さなエナメル靴を踏みならし、お気に入りのののしりをがなり立てるのが部屋の中からも聞こえた。氏は乱暴にまたこっそり、闇の中で考え事をするのに慣れている坑夫よろしく、がなり立てた。そうして、ぼくは氏を部屋の中に入れた。

「いつもドアの鍵をかけるのか。」氏は尋ねた。タイル張りの壁までちょこちょこと歩いた。

「動かなかったんだよ。」ぼくは答えた。

氏は身体をぶるっと震わし、ボタンをとめた。

氏は上役の記録係、偉大なる速記者だった。のべつまくなしにたばこを吸い、ビター〔訳注：ビールの一種〕を好んだ。とても愉快で、丸顔で、腹も丸かった。鼻は投げ矢の刺さった穴だった。あるとき、「タウィ新聞社」の便所で、氏をじっと見ていて、こう考えたことがあった。氏はもしかすると、気取って歩けば、もちろんバランスを取るのにステッキが必要だがね、それからチョッキの前を飾る懐中時計の鎖、金（きん）の差し歯、さらにたぶん自分の家の庭で取れたバラの花をボタンホールに差してたりすれば、きざな態度の男になっていたのかも知れない。でも今は、正確な動きをしようとして、やる前から、ぎこちなく固まっていた。氏が親指と人差し指の先を合わせると、ただ垢がたまり、ひび割れた爪、それからウッドバイン〔訳注：たばこの一種〕のしみが見えた。氏はぼくに一本くれて、マッチを探してコートを振った。

「火はここだよ、ファーさん。」

氏と仲良くするのは楽しいもんだ。氏は大きな事件を全部受け持っていた。時折起こる殺人事件、たとえばトマス・オコーナーが妻の頭の上から瓶を振り下ろしたときのこととか、でもそれはぼくが就職する前のことだ、ストライキ、ひどい大火事。ぼくもまた氏と同様に、たばこを構えた。悪習の吊り下げバッジというわけだ。

「壁に書いてある字を見てみろ。見苦しいだろう。時と場所というものがあるんだ。」氏は言った。

ぼくに目配せをして、禿げたところを、まるでそこから考えがわき出してくるように、掻いて、言った。「ソロモン氏が書いたんだ。」

ソロモン氏というのは、記事の編集者で、ウェズレー教徒〔訳注：John Wesley（1703-91）が説いた福音主義を信奉するプロテスタントの一派〕だった。

「ソロモンじいさん。あいつは赤ん坊を見ると、余興で半分に切ったんだ。」

ぼくはほほえみ、言った。「やりかねないね。」でもソロモン氏に対する軽蔑が、実際感じているわけではなかったのだが、分かるように、答えればよかったと思った。ぼくが三週間前に働き始めて以来の、これこそ男の偉大なる瞬間だった。そしてもっとも愉快な瞬間だった。ひび割れたタイルの壁にもたれ、たばこを吹かし、笑みを浮かべ、水で濡れた床に靴で円を描いて、眼は足元を見ていた。そうやってぼくはこの重要人物の老人とちょっとした悪ふざけをしていた。こんなことでもなければ、ぼくは昨晩上演の『キリストの磔（はりつけ）』の評を書いているか、おろしたての帽子を斜にかぶり、なにか事件を求めて、クリスマス間近の土曜日、混み合った街をうろついていただろう。

「いつか一緒に来いよ。」ファー氏はゆっくり言った。「波止場のフィッシュガード亭まで行こう。パブに船乗りたちがたまっているよ。今夜どうだい。ジャージ卿亭には一シリング〔訳注：1971年まで使われた貨幣単位〕の女もいる。わしみたいにウッドバインを吸ってみろよ。」

氏は若者のように手を洗い、巻きタオルで汚れを拭いた。洗面台の上にある鏡をのぞき込み、口ひげの端をくるくるひねった。そしてすぐにまた元に戻って垂れるの見ていた。

「仕事を始めよう。」氏は言った。

ぼくはロビーに入った。氏は自分の顔を鏡に押しつけて指は毛むくじゃらの鼻の穴を探っていた。

そろそろ十一時だった。ハイストリートのたばこ屋の二階にあるカフェロワイヤルでココアかロシアンティーを一杯飲む時間だ。そこには事務員や店員、それから父親の会社で働いたり、あるいは株の仲買人や事務弁護士〔訳注：法廷に立つ弁護士barristerと訴訟依頼人の間にいて、裁判事務を扱う、いはば仲介役の弁護士〕に年期で雇われている息子たちが毎朝、ゴシップやニュースを求めて集まってくるところだ。ぼくは人混みの中を通り抜けた。谷の街の男たちはフットボール観戦だ。土産物屋の客たち、店の窓をのぞき込むもの。押し合いへし合いしている通りの角で、ものも言わずに立ち止まっているむさ苦しい男たち、雨の中じっと立ちつくしている。乳母車を押す母親たち。黒服のばあさんたち、服にはブローチをつけ、かごを抱えている。小生意気な娘たち、マッキントッシュを輝かせ、水玉模様のストッキング。背の低い、めかし屋のインド人砲兵、天気にあきれている。濡れたゲートルを巻いた実業家。それから傘でできたキノコの森を抜けて行った。ぼくはきっと書かないであろう一節のことをずっと考えていた。そろそろ話のなかに引っ張り込んでやろうかな。

コンスタブル婦人は、買い物の荷物を抱え真っ赤になって、ウルワース〔訳注：いわゆる百円ショップ〕から雄牛よろしく吐き出されてきたときに、ぼくを見つけた。「あんたのお母さんの顔を長いこと見てないけど。今年のクリスマスは人出が多いねえ。お母さんによろしくね。モダン亭でこれからお茶にするのよ。ほらそこのところ。」コンスタブルさんは言った。「鍋をなくしちゃったのよ。」

パーシー・ルイスが来るのが見えた。学校時代、チューインガムをぼくの髪にくっつけたやつだ。

帽子屋の店先を背の高い男がのぞき込んでいた。人混みに逆らい、じっと立っていた。カフェにたどり着き、階段を上るころには、吉報といわれるものは全然そんなものでないことが身にしみて感じられ、ぼくの周りで本領を発揮した。

「スワファーさん、何を差し上げましょう。」

「いつもの。」ココアといくらでも食べていいビスケットだ。

若い男たちはすでに集まっていた。口ひげをまばらに生やしているもの、ほほひげを生やして、髪をうねらせているもの、曲がりパイプを吹かし、歯に挟んでしゃべっているもの、ピンストライプのズボンに糊で固めた襟もいた。押し出しの強いクリケットの選手も。

「ここに来いよ。」レズリィ・バードが言った。バードはダン・ルイスのところに身を寄せていた。

「今週は映画に行ったかい、トマス。」

「うん、リーガル館だ。『嘘も方便』。すっげえよかったよ。コニー・ベネットはすごい。泡風呂の彼女、憶えているかい、レズリィ。」

「泡が多すぎたな、あれは。」

この街特有の開口音の母音が意識の中に入り込んできた。なまりのある、例の抑揚が耳にとまり、迫ってきた。

道の向こう側の万国百貨店のてっぺんの窓には、手にお茶のカップを持って、制服を着た女たちが集団で立っていた。ひとりがハンカチを振った。ぼくに振っているのかなと思った。「またあの黒いやつだよ。きみを見つめているよ。」ぼくは言った。

「制服を着ているとみんなきれいだな。あいつらがおめかししたときに声をかけてみろよ。すごいぜ。前に背の低い看護婦とつきあっていたんだが、制服姿はまるで桃だったよ。ほんとにあかぬけていた。いや、本気だぜ。ある晩、ダンス・パーティで拾ったんだ。その娘はよそ行きの服を着ていた。えらい違いさ。マークス・アンド・スペンサー〔訳注：衣料を扱う専門店（既出の衣料版ウルワース）だったが、いまではスーパーマーケットになっている。〕みたいだった。」しゃべりながら、レズリィは眼の端から通りの向こうを見ていた。

その娘ははまた手を振って、むこうを向いて、くすくす笑った。

「かなり安っぽいな。」レズリィは言った。

ぼくは言った。「それにオードリーちゃん、笑いに笑ってたね。」

レズリィはメッキのシガレット・ケースを取り出した。「プレゼントなんだ。まあ一週間もしたら質屋の叔父のものさ。トルココーヒーでも飲めよ。」

レズリィのマッチにはオールソップス〔訳注：オールソップスは英国の酒造メーカー。19世紀には第二位の規模だったが、20世紀中頃、Ind Coopeに吸収合併された。〕の印が入っていた。カールトン亭で手に入れたんだ。カウンターにかわいい娘がいてな。仕事ぶりもたいしたもんだ。行ったことないだろ。今夜一杯どうだ。ギル・モリスも来るぜ。いつも月二回は土曜日にはまりこんでるよ。メルバ亭ではダンスもある。」

「いや、今夜は上役と飲むことになっている。また別の日にな。じゃあ、レズリィ。」

ぼくは自分の分、三ペンスを払った。

「カシー、さよなら。」

「さよなら、ハニー。」

雨はやんでいて、ハイストリートが光っていた。電車通りを歩いていると、きちんとした姿の男がひとり幟を掲げ、明らかに神を怖がることばを口にしていた。

マッシューといった名前だった。何年か前に英国の港から救い出され、今は夜な夜な祈祷書と懐中電灯を手に、ゴム靴を履いて路地を歩き回っているのだった。角笛亭の通用口から制作係のエバンス氏が入っていった。タイピストが三人、昼食、ゆで卵とミルクシェーキだろう、を取りに急いで通り過ぎた。ラベンダーの香りが残った。アーケードを通って遠回りすべきか、壊れた乳母車、中は空だった、を押している老人を見に立ち寄るべきか。老人はいつもそこ、楽譜屋のそばに立っていた。そして帽子を取って、一ペニーくれと言わんばかりに、髪に火をつけるのだ。それはもちろんこどもたちを楽しませるためのトリック。そうしてぼくはチャペル通りを通って近道をした。ストランドと呼ばれているスラム街の端から、イタリアの甘い薄片を売っている店を通り過ぎた。その店は、めざとい親のいる息子どもが、最終電車に乗る前、二ペンス分ばかり買って、息の臭さを隠すのだ。ぼくはそれから会社の狭い階段を上り、記録室に入った。

ソロモン氏が電話口でがなり立てていた。「寝ぼけているのか、ウィリアムズ。」という最後のことばが聞こえた。氏は受話器を置いた。「あいつは戯言ばかり並べ立てる。」氏は誰ともなしに言った。ソロモン氏はののしることはしない人だった。

ぼくは『キリストの磔（はりつけ）』の評を書き終え、ファー氏に渡した。

「芋を食うて屁をこくような贅言が多すぎだな。」

半時間して、テッド・ウィリアムズがゴルフ行きの格好でほほえみながらにじり寄ってきた。親指を鼻に当て、ソロモン氏の背中に向かって四本の指をぱらぱら振って見せた。そして爪ヤスリを手にして、隅の方に静かに座った。

「何を怒鳴られてたんだい。」ぼくは小声で言った。

「ある自殺のことで外に出ていたんだ。ホプキンスという名の電車車掌だよ。遺された奥さんが俺を引き留めて、お茶をごちそうしてくれたというわけだ。それだけだ。」テッドは彼なりに人を引きつけるところを持っていた。男というより女の子だった。ロンドンのフリート街を夢見て、夏になると、デイリー・エクスプレス社の前を行ったり来たり、そしてパブで名士を探して、二週間を過ごした。

土曜は午後自由だ。一時になって、退社の時間だった。でもぼくは居残り続けた。ファー氏は何も言わない。ぼくは忙しい振りをして、走り書きをしたり、似ているわけではないのだが、ソロモン氏のサイチョウみたいな横顔や原稿運びの少年を漫画にした。そいつは電話ボックスの窓の向こうで調子のはずれた口笛を吹いていた。ぼくは名前を書いた。「地球、ヨーロッパ、イングランド、南ウェールズ、タウィ、タウィ新聞社、記録室」〔訳注：JoyceのStephen Dedalusが自己位置確認のためにこれと同じ行為をする。ただし、ウェールズはイングランドではない。〕。それからまだ完成はしていない本のリスト。「父親（おやじ）たちの国―あらゆる面から見たウェールズ人の人となり―」「十八歳―田舎ものの自伝―」「つれない女たち―小説―」ファー氏はまだ目を上げなかった。ぼくは続けて書いた。「ハムレット」。たしかにファー氏は頑固に会議メモを書き写してはいたが、忘れているわけではなかった。身体をこちらに傾けて、ソロモン氏がささやくのが聞こえた。「オールダーマン・ダニエルと地獄にでも行け。」一時半だった。テッドは夢を見ていた。ぼくはゆっくり時間を掛けて、コートを着、オールド・グラマー・クラブのスカーフをああでもないこうでもないと、締め直した。

「半日休を取るのを嫌がるやつもいるよなあ。」ファー氏が突然言った。「ランプ亭の奥部屋に六時だ。」氏は振り向きもせず、書く手を休めもしなかった。

「すてきな散歩にでもいらっしゃるの。」ぼくの母が尋ねた。

「ああ、共有地だ。お茶は先に済ましてくれ。」

ぼくはプラザ館に行った。「新聞社だ。」チロリアン・ハットとスカートの娘に言った。

「今週は記録係の人が二人いらっしゃいましたよ。」

「特別批評のためだ。」

娘は座席まで案内してくれた。教育映画では、ぼくの眼の前でむき出しの種が絡まったり、芽を出したり、腕や脚のような植物もあった。その間、ぼくはいかがわしい飲み屋の、例の巻き毛の女たちと女々しい水夫たちのことを考えていた。カミソリを手にしてのけんかもあるのだろう。テッド・ウィリアムズは、水夫への特命亭の前で唇を一枚見つけていた。ひげが少し付いていた。植物は曲がりくねりながら、スクリーン上で踊った。タウィがもっと大きな海港の街でさえあったら、ピンク映画を見せてくれる地下室がいくつもあるのだろうに。暇人の生活はおしまいだ。そうしたら、アメリカの大学に入って、学長の娘とダンスをする。リンカーンという名の主人公がいる。背が高くて、色が黒く、いい歯をしているやつだ。ぼくはすぐにそいつに取って代わった。そいつの影が近づくと、学長の娘はぼくの名を言うんだ。セーラーハットと水着を着た大学のコーラス隊がぼくのことを、大物だ帝王だと節をつけて、呼ぶ。ジャック・オーキィ〔訳注：アメリカの俳優。『タッチ・ダウン』（1931）など多数の映画に出演〕とぼくは競技場を駆ける。学長の娘とぼくは、群衆の肩に担がれ、キスをして、色の変わるカーテンを閉じた。キスのせいで、ぼくはくらっとして眼を輝かせ、そうして映画館から、雨の街、外灯の強い光の中へと出て行った。

人混みの中で雨に濡れながら何をするともなく過ごす、まる一時間。ぼくはエンパイアの外の行列を見ていた。『パリの夜』のポスターを読んだ。そうしてコーラスガールたちの長い脚、びっくりするような顔を思

い浮かべた。その週の初め、コーラスの女の子たちが冬の日差しの中、腕を組んで通りをあちこちと散歩していた。女の子たちの口、真っ赤な傷あとみたい。「つれない淑女たち」の最初のページでその口がそっと動いたのをぼくは憶えていた。その詩は始まることはなかった。女の子たちの髪、真っ黒だったり、銀だったり。香水と化粧は暑い褐色の東洋を思い起こさせた。眼は水たまりだ。ローラ・デ・ケンウェイ、バブス・コーシィ、ラモナ・デイはこれからもずっとぼくとつきあってくれるだろう。ぼくが、消耗性の、痛みのない病気で、死ぬまで、そうやってぼくはかねて用意していた最後のことばを吐くまで、いつもデートしてくれるだろう。ハイ・ストリートの店の窓に明々と明かりがともる頃、消えてしまった夜によどんだぼくの青春を思い出させてくれる、そして飲み屋から歌を歌って出てくる。ハフォッド亭の歌姫たちが、湯気を上げているポテトチップの店に来て、ハンドバッグを膝に乗せ、イヤリングをカタカタいわせて、座っている。ぼくは立ち止まって、ダーティ・ブラックの店先をのぞき込む。仲介屋だ。でも公認だ。かゆみ粉だのくしゃみ粉だの、悪臭弾、ゴム製のペン、それから口ひげ付きの仮面などがあるだけだ。目新しいものはみんな中だった。でもぼくは、たぶん女が出てくるだろうと思って、中に入ろうとは思わなかった。口ひげをはやした、訳知り顔の、ミセス・ダーティ・ブラックだ。あるいは前に一度見た、痩せて、犬顔の女の子。女の子は目配せをした。会葬のにおいがした。市場にたどり着くと、ピンクの口中香飴を買った。先はどうなることやら。

三つのランプ亭の奥部屋は歳を取った男たちで一杯だった。ファー氏はまだ来ていなかった。ぼくはビターを飲みながら、カウンターにもたれた。両側に参事と事務弁護士がいた。親父が今来てくれたらなあと思った。同時にアベラフォンの叔父Ａを訪ねていっていることにうれしくも思った。もうぼくが子供ではないことをきっと分かってくれるだろう。それから紙巻きたばこと帽子の角度を見て、それからぼくが手にした大きなジョッキに恐れをなして、きっと怒ることだろう。ビールの味は気に入った。踊っている白い泡も、真鍮色の深みのある輝きも、濡れた茶色のガラスの壁越しに突然広がる世界、グラスを傾けすばやく唇につける、ゆっくり飲み込めばお腹にひたひたと押し寄せる。舌に載せた塩も。口角の泡も。

「もう一杯、嬢。」中年のおばさんだ。「嬢も一杯どうだい。」

「仕事中はだめよ。でもありがとうね。」

「どういたしまして。」

あとで一緒に飲もうという誘いなのか。女が出てくるまで、裏木戸で待てということか。それから夜を歩いて、海辺の遊歩道、砂地、柔らかな砂丘へ。そこでは恋人たちがコートにくるまり、マンブルズの灯台〔訳注：Swanseaの有名な灯台〕を見ながら、愛をささやいている。女はぽっちゃりして、顔はまずまずだった。髪は鳶色で、灰色のカラリングを入れていた。女は、お袋が息子に映画代でもくれるように、おかわりをくれた。もしクリームでも載せようものなら、デートはしない。

ファー氏は酒もたばこも邪険に断り、みすぼらしい群衆から目をそらし、ハイ・ストリートを急いできた。貧乏人、病人、醜悪な奴ら、そうしたあらずもがなの人々が自分の周りにぴったりくっついて、やあ、とでも言うような目つき、あるいは同情のそぶりでも見せたら、その中に埋まりこんで、その晩はもうだめになってしまうとファー氏は思った。

「もうジョッキひとつ腹ん中に入ったかい。」ファー氏はすぐそばに来て言った。

「こんばんは、ファーさん。ときどきは気分転換ですよ。何にします。ダーティ・ナイトですか。」

はやっている店に入り、雨も物騒な通りも避けて、ここまでくれば貧乏人も過去のいわくつきのものどもも自分に触れることはできない。ビジネスマンや専門家たちに混じり、のろくさくグラスを手にし、明かりに向けて掲げた。氏は言った。「もっとダーティになるぞ。フィッシュガード亭に行くまで待ってろよ。乾杯。そこにはな、船乗りたちが寄り集まっている。それからジャージ亭の魚取りばあさんたち。そうして新鮮な空気を吸いに西の方に行かなくちゃならない。」

制作のエバンス氏がカーテンに覆われている横のドアから素早く入ってきた。飲み物をぼそっと告げると、コートでそれを隠し、見えないようにしてぐっと飲んだ。

「同じやつ。それからこいつのペン先に祝いを込めてもう半分。」ファー氏は言った。

バーは大変高級で、クリスマスとは関係ないようだった。張り紙に「女性お断り」とあった。

エバンス氏はコートのテントの中で酒をあおっていた。ぼくたちは出た。

ゴート通りでこどもたちが叫んでいた。ひとりの少年が時期でもないのに、ぼくの袖を引いて、叫んだ。「恵んでくれよ。」男の帽子をかぶった大柄女たちが入り口をふさいでいた。セレブな姉さんがカールトンホテルの向かいの公衆便所の角からウインクを投げてよこした。ぼくたちは音楽に合わせて入っていった。バーにはリボンや風船が飾られ、結核のテノール歌手がピアノにしがみついていた。カウンターの向こうにはレズリー・バード亭のかわいいメイドが若い男たちをからかっていた。男たちは身体を乗り出して、ガーターを見せてくれと言っていた。それからジン・ライムはどうだ、二人っきり深夜の散歩はどうだ、映画館でしっぽり冒険といこうぜと言っていた。ファー氏はせせら

笑って、グラスを見ていた。ぼくはその若者たちをうらやましい気持ちで見ていた。若者たちの態度にその娘が気に入っていることが見て取れた。娘は、自分のかわいさと陽気さを充分わかっていて、軽く手を打ち鳴らし、身体をくねらせ後ずさりし、ビール樽の取っ手を握った。

「谷から例の双子が来ている。今夜は大変なことになろうよ。」氏はうれしそうに言った。

髪をてかてかになでつけ、顔は青白く、ガタイが良く、ほお骨が張って、眼が落ちくぼみ、明るい色のネクタイを締め、ダブルのチョッキに、幅広のズボンを着た若者たち、中には炭坑でつけたあばたがそのままのものもいる、その大きな手にはひどい傷があった。みんな狂喜して酔って、ピアノの周りに立ち、歌っていた。平坦な胸のテノールが澄んだ声で、音頭を取っていた。ああ、こうした示唆に富む遊び、身体を揺らしている聖歌隊に入り込んでいけたら、「天国の糧」を声張り上げ歌えたら、後ろを向いて、両腕を小モスクワ〔訳注：Swanseaから30マイルほど離れたところにあるRhondda Valleyらしい。19世紀終わりに、Rhonddaの石炭を運び出すために鉄道が敷かれた。〕から来た奴らと組むんだ。あるいはカウンターで冗談を飛ばしたり、色目を使ったりして、無邪気なあるいは汚い恋をしたなら。こぼれたビールと積み重なっていくグラスの間からは何が生まれるわけでもないんだが。

「うるさい夜の烏どもとはおさらばだ。」ファー氏が言った。

「うるさすぎますね。」ぼくは言った。

「さてどこに行こう。」ぼくたちはストランド街の路地を這いつくばるように行った。死体保管所の横、ガスランプで照らされた小道、ここには赤ん坊が幾人もどこかにいて、泣き声を上げていた。そうしてフィッシュガード亭に着いた。ちょうどそのとき、エバンスさんのようにマフラーで顔を隠した男がぼくたちの前をすり抜けていった。手袋をした手に瓶かジョッキをつかんでいた。バーには客はいなかった。カウンターの向こうには老人が座っていて、両手が震えていた。そうして大型の懐中時計を見つめていた。

「メリー・クリスマス、親父。」

「こんばんは、ファーさん。」

「ラムを一杯。」

赤いボトルがふたつのグラスの上で震えた。

「特別な毒薬だ、きみ。」

「眼が飛び出すぜ。」ファー氏が言った。

ぼくのうすのろ頭はぐらつかない。船乗りが飲むどんなラム酒もぼくのがんとした腹を腐らせることはできない。ポートワインをちびちび飲むレズリー・バードのやつ、それからギル・モリス、あいつは眼の下に石墨で毎週土曜日の夜、浪費の印をつけている。あいつらがぼくの姿を今見てくれるといいと思った。暗いちんけな部屋の中にいる。壁にははがれかけのボクサーの写真。

「毒薬をもう一杯、親父さん。」ぼくは言った。

「今夜は常連はどこだい。リビエラ亭かな。」

「個室の方ですよ、ファーさん。プロテロさんの娘さんの寄り合いなんです。」

王室のしめった肖像画が飾られた奥の部屋には、黒服の女たちが、ギネスの泡がついた背の低いグラスを眼の前に、堅い長椅子に腰を下ろして、笑ったり泣いたりしていた。向かい側にはジャージ地の服を着たふたりの男がなめるように酒を飲みながら、女たちの感情にいちいちうなずいていた。部屋の中央の椅子には老婆が、ボンネットのひもをあご下で留め、羽根の襟巻き、白の運動靴、忍び笑い、ほかのものよりは大きな声で涙を流していた。ぼくたちは男用長椅子に座った。男のひとりがけがをした方の手で帽子に触れた。

「何の寄り合いだい、ジャック。」ファー氏が尋ねた。

「連れは初めてだろう、同僚のトマス君だ。こっちはジャック・スティッフ君、死体安置所の管理人だ。」

ジャック・スティッフは唇の角からしゃべった。「そちらがプロテロの奥さん。おれたちはガルボばあさん〔訳注：ガルボはスウェーデン出身の女優。1905-1990。テネシー・ウィリアムズやジャン・コクトーに絶賛された。結婚はせず、『奥様は顔が二つ』（1941）を最後に映画界から去った。帽子やトレンチ・コートでも有名。〕と呼んでいるんだ。似てないからな、だろ。一時間前に病院からことづてをもらってな。ハリスさんとこのウィニフレッドがここまで持ってきたんだ。二番目の娘が、腹が大きかったんだが、亡くなったんだと。」

「お腹の子も、女の子だ、死んだんだ。」横の男が言った。

「それでばあさんたちが悔やみに来ているというわけだ。みんな金を一杯集めたんだが、ガルボばあさんはみんなで全部飲み尽くそうとしている。もう二本も飲んでいる。」

「けしからんな。」

暑い部屋の中、ラム酒が焼け付き、ぴりぴりしたが、ぼくの頭は山のように断固としていた。朝までに十二冊の本を書けるだろう。ビール樽のようにカールトン亭のバーの女の子とタウィ川の砂の岸辺を、転がってもいける。

「われわれに乾杯。」

新客を眼の前に、女たちはさらに大きな声で泣いた。プロテロさんの膝や手を叩き、ボンネットを直し、死んだ娘をほめた。

「プロテロさん、何をもらうかな。」

「いいえ、持ってきているよ、家に一番いいのがあるからね。」

「そうかい、ギネスがいいかなと思ってな。」

「少し、あるものが入っててね。」

「ではマーギーのためだな。」

「ここにあの娘がいると思ってね。『ひとつの廃墟』か『トリガイとムラサキガイ』を歌ってくれているよ。ほんとうにしかるべき奥方の声をしていたよ。」

「ああ、ハリスさん、やめてください。」

「ほらほら、プロテロさん、元気をお出しなさいな。悲しんでいると、猫だって死んでしまう。さあ、一緒に歌いましょう。」

「碧い月は、白い山の上、
お日さまは、青い海の下、
わたしは恋人と、きれいな水晶の泉へと歩いていく。」

プロテロさんが歌った。

「娘さんが好きだったねえ。」ジャック・スティッフの連れが言った。

ファー氏がぼくの肩を叩いた。氏の手はすごい高みからゆっくりと降りてきた。氏のかぼそい鳥のような声が天井にぐるぐる巻きの渦を作り、そこから話しかけてきた。「少し外の風に当たろうか。」

こうもり傘にボンネット、白の運動靴、酒瓶と白粉王、歌う死体安置所の男、『トラリー〔訳注：アイルランドの町〕のばら』が個室の中で泳いでいた。ふたりの小さな男たち、ファー氏とその双子の兄弟だ。そいつらがつるつる滑るアイスリンクの床を引っ張って、ドアまでぼくを連れて行った。夜の空気がぼくを叩いた。夕べが突如始まったのだ。壁が傾ぎ、ぼくのトリルビー帽子を叩き飛ばした。ファー氏の兄弟は道の丸石の下に消えた。水牛のように壁が迫ってきた。おい息子、避けるんだ。アンゴスツラ〔訳注：柑橘類の木皮、薬用〕を飲め、ポリー、ブランデー、そうだファーネット・ブランカ、ああ、お母さんのお気に入りだな、を持ってこい、迎え酒だ。」

「少しは良くなったか。」

ぼくはフラシ天の椅子に座っていた。椅子はぼくが見たことのないものだった。ぼくは防虫剤の飲み物を飲み、テッド・ウィリアムズとファー氏の議論を楽しんでいた。ファー氏は厳しく言っていた。「船乗りを探しに、ここに来たんだろう。」

「いいえ、そうではありません。地方色を求めてですよ。」テッドが言った。

壁に貼り紙があった。「『ジャージ卿亭』経営者―ちびのトマス」、「賭け事なし、く××たれ。」「神はご自身を助けられる、でもおまえはそうしてはならない。」「女性以外の女性お断り。」

「ここはおもしろい飲み屋だな。貼り紙を見てみろ。」ぼくは言った。

「おお、元に戻ったな。」

「うんとこしょの気分ですよ。」

「おまえ向きの、かわいい娘がいるぞ。見てみろ、流し目だ。」

「でも、鼻がないぞ。」

ぼくの酒は、あっという間に、ビールに変わっていた。金槌が音を立てた。「注文、注文。」新しいホールの方で音がして、襟無しシャツで椅子に座ったやつが葉巻を手に、ジェンキンスさんに『湖の百合』を歌うよう言っていた。

「では、お求めによって。」ジェンキンスさんは言った。

「つぎはセバストポル通りのケイティの番よ。何を歌うの、ケイティ。」

ケイティは国歌を歌った。

「フレッド・ジョーンズさんはいつもの調子っぱずれを歌ってくれるんだな。」

しわがれたバリトンがコーラスを乱した。ぼくにはそれが自分の声だと分かった。そして小声にした。

救世軍の女の子がふたり火夫の腕を逃れ、『鬨のこえ』を売りつけた。

頭にぎらぎらのハンカチを巻き、つま先が穴あきになっている白黒のよそ行き靴を履いた若者が、バー全体で「メイベル」と叫ぶまで、踊った。靴下は履いていなかった。

テッドがぼくの横で手を叩いた。「その調子。『夜の世界亭のニジンスキー〔訳注：当時の舞踏家〕』。おもしろい話があるんだ。ぼくが対談するとしたら、どうだい。」

「話半分だな。」ファー氏が言った。

「怒らせないでくださいよ。」

波止場からの風が通りを裂いた。浚渫船が乱暴に港で声を上げているのが聞こえた。船が入港するのに口笛を鳴らしていた。ガス灯が挨拶をして、折れ曲がった。それからまた煙が壁の周りに迫っていた。女性用長椅子の上にはジョージとメアリが馬鹿話をしている絵がかかっていた。ジャック・スティッフが動物の前足のように片腕を身体の前にあげ、ささやいた。「ガルボばあさんはどこかに行ってしまったね。」

悲しく、陽気な女たちは寄り集まっていた。

「ハリスさんの娘が知らせを誤解してね。ガルボばあさんの娘は全くぴんぴんなんだ。赤ん坊は死産だったけど。ばあさんたちは金を返してもらいたいと言っているが、ガルボさんがどこにいるか分からないんだ。」ジャックは手をなめた。「どこに行ったか知ってるぜ。」

小さい声で女たちはプロテロさんの悪口を言っていた。嘘つき、不義、ごろつきのお袋、泥棒。

「ばあさんはあれだよ。」

「死んでも直らないね。」

「チャーリーに入れ墨を彫らせたよ。」

「三シリング八ペンス、ばあさんに貸しているよ。」

「わたしは二シリングと十ペンスだ。」

「わたしの歯の治療費もだよ。」

「わたしは年金の一シリングと六ペンスを貸したよ。」

だれがぼくのグラスに酒をつぎ続けているんだろう。ビールがぼくのほほをつたって襟へとこぼれた。ぼくの口のなかは唾液で一杯だ。長椅子がくるくると回った。フィッシュガード亭のキャビンが傾いだ。ファー氏はゆっくりと退却した。望遠鏡がよじれた。氏の顔は、その幅広で毛の生えた鼻孔から、ぼくの顔に向かって息を吐いた。

「トマス氏は気分が悪くなっているみたいだ。」

「アーサーのおばさん、傘に気をつけて。」

「首を取っちまいな。」

最終電車が音を立てて、ホームに着いた。ぼくは運賃を持っていなかった。「ここで降りるんだ。気をつけてな。」親父の家までの丘はぐるぐる回って、空に届いていた。誰も起きていなかった。ぼくは手近のベッドまで這っていった。壁紙が寄り集まってきて、ぼくを飲み込んだ。

日曜日は、一マイル離れたセント・メアリ教会の鐘が礼拝の時間を過ぎてもずっと、ぼくの頭の中で鳴ってはいるが、静かな日だった。この先二度と酒を飲むことはあるまいと思いながら、ぼくは昼の食事までベッドの中にいた。そうして、十時の街のくるくる変わるものの形や遠くで聞こえる声を思い出した。新聞を読んだ。その日の報道は皆ろくでもないものだった。でも「主は花を愛した」という記事にぼくはいたく感動し、当惑と悔恨の涙を流した。ぼくは日曜の肉と三種の野菜を失礼した。

午後、公園で、誰もいない野外音楽堂の近くでひとり座っていた。ぼくは玉になった紙くずを手に取った。風が砂利道からロックガーデンまで吹き飛ばしてきたものだった。広げて、膝の上に置いて、希望もなく、詩の最初の三行を書いた。寒空の下、葉の落ちた木の後ろにぼくがしゃがんでいると、犬が寄ってきて、手に鼻をすりつけてきた。「ぼくの友達。」ぼくは言った。黄昏時になるまでそいつはぼくと一緒にいた。鼻を鳴らし、身体をかきむしっていた。

月曜の朝は、恥と嫌悪感とで、みんなに顔を合わせるのが怖かった。ぼくは記事と詩を破棄し、タンスの上に放り投げた。ぼくは新聞社に向かう電車の中で、レズリー・バードに言った。「土曜日、君も一緒に来れば良かったのに。すごかったぜ。」

クリスマス・イブの火曜日、夜早く、半クラウン〔訳注：二シリング六ペンス貨〕を借りて、フィッシュガード亭の奥部屋まで歩いていった。ジャック・スティッフがひとりでいた。女性用の長椅子は新聞で覆われていた。風船が束になって、灯からぶら下がっていた。

「乾杯。」

「メリー・クリスマス。」

「プロテロのおばさんはどこだい。」

ジャックの手には包帯が巻かれていた。「おや、聞いていないのかい。あのばあさんな、寄付の金を全部遣ったんだよ。橋向こうの心の喜び亭まで持って行ったんだ。周りのばあさん連中に見られないようにな。一ポンド以上あった。娘が亡くなったんではないとみんなが気づくまでに全部遣っちまってな。もう顔を合わせられないな。一緒にこれを飲もう。それで樽栓閉めの月曜日までには完了というわけだ。それから橋を歩いて渡っていくのを、バナナ船を降りたふたりの男が見ている。そうしてばあさんは真ん中で立ち止まった。でもその男たちは間に合わなかった。」

「メリー・クリスマス。」

「床に運動靴が一足置いてあるだろ。」

ガルボばあさんの友達はだれもその晩来なかった。

この記事をずっと後になって、ファー氏見せたところ、「理解が間違っているよ。人物がごちゃごちゃだ。ジャージ亭で踊っていたのは、ハンカチを持っていたやつだぜ。フレッド・ジョーンズというのはフィッシュガード亭で歌を歌ってたんだ。まあ、気にするな。どうだ、ネルソン亭で今夜一杯。船乗りが噛んだ痕を見せてくれる女の子がいるぜ。ジャック・ジョンソンと知り合いの警官もいる。」

「では、全部順々に記事にしていきましょう。」